
盜賊王子と召喚師

八城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗賊王子と召喚師

【Zコード】

N6728Y

【作者名】

八城

【あらすじ】

粗筋は未定ということです。

背中には高い塀、目の前には大きな木と茂み。ここなら誰の田にもつかないだろ?と判断して、タカナシケイ高梨景は腰を下ろした。

景は深く息を吐いた。それは溜め息のように聞こえた。深呼吸をしてもまだ、心臓の鼓動は落ち着いてくれない。地面の芝生をなでてみる。手のひらに、抜けた芝が何本かくつついていた。

庭の全面が芝生とは、豪勢なものだなと景は思った。

芝生だけではない。目の前に生えている木はイチョウ、そのすぐ隣はクスノキか。より前方にはフェニックスと呼ばれる椰子の木まで見える。個人の庭にしてはすいぶんと賑やかな植物たちが、統一感なく並んでいた。

悪趣味な金持ちめ……と、景は万人並みの妬みを感じる一方で、木々が多いのは隠れやすくて好都合だと冷静に計算してみた。

景の視線の先、イチョウよりフェニックスよりも先には、大きな洋風屋敷があつた。

屋敷までの距離は20メートルほど。塀まで20メートルある庭というのもかなり広いが、屋敷もそれに劣らず大きい。

意匠のこらされた白い壁、それが長々と続いており、寮かそれとも宿舎かと思うほど窓の数が多かつた。表に『犬吠埼』という表札がなければ、ここが個人の邸宅だということに誰も気づかないだろう。

城みたいだな、と景は思った。

景は懐から携帯電話を取り出し、指先で操作した。ホール音もなく、すぐに相手との通信がつながる。

「状況は？」

相手の声は落ち着いていた。景が心臓バクバクで超のつく緊張状態だからこそ、余計にそう聞こえたのかもしれない。

「潜入成功」と景が答える。

「周囲は？」

「大丈夫だ。正門からも屋敷からも遠い。小声で注意してしゃべれば、絶対に誰にも聞こえない」

「良し」

「良じじゃねえ！！」

景の怒声が響いた。

「とてもじゃないが、『小声で注意して』しゃべったような音量ではない。」

「今のは、周囲に気づかれてないだろうな？」

「……大丈夫だろ。ここは庭すつげえ広いんだから。公園か！つてツツコミたくなるくらい広いスペースの隅っこにいるんだから。それより、ここはどこなんだよ！俺は今から何をさせられるんだよボケえつ！」

「おいおい荒ぶるなよ。ピリピリしてもいいことないぜ？」

「うつさい！他人ごとみたいに余裕な態度が腹立つ！俺のよくわからん場所に送りこんだのはあんただろ」

「情報の不足。」

それが景を不安にさせていた。

なにせ場所の詳細はおろか、任務の遂行目標すら分からぬまま、景は通信の相手 エルム・グリーンが指示した住所に忍び込んだのだ。

「おいおい、なんだよその口の聞き方。仮にも俺はお前の先生だぜ

？」

「都合のいいときだけ師匠ヅラすんな。いいから仕事の詳細を教える」「

「落ち着けつて。お前のことは信用してるが、さつきから少々声が大きすぎるぞ。もう少し気をつけた方がいい。ヤクザって人種は意外と地獄耳だからな」

「ヤクザ？ いまヤクザって言つた！？」

「ああ、違う違う。間違えた。暴力団つて人種は意外と地獄耳……」

「間違えてねえよ！ 一緒にやくざも暴力団員も！ なにこれ、そういうことなの？ 正門に表札あつたけど、犬吠埼さんつてそつち系の人なの？」

「ああ。お察しのとおり、犬吠埼家はジヤパニーズマフィアの総本山だ」

「やつぱりかよ。もうやだ。怖いよ。殺されちゃうよ」

「あつはつはつはつはー。わざとらしい怖がり方だねえ。お前からすれば普通の人間が数十人や数百人襲つてきたところで、危なくともなんともないだろうに」

「いやいやいや、奴ら銃持つてんだぞ！？ 敵とみるや問答無用でバキューんいくんだぞ！？ 当たつたら死んじゃうよ」

「それが当たらないから、俺たちは商売やつていけるんだろ。」

「他人事だからそんな気楽なこと言えるんだよ。お前も来てみりや分かるつて。正門には黒服いるしバカみたいに塀は高いし防犯カメラはついてるし、庭まで来るだけでもドキドキしすぎて何年か寿命縮まつてるんだぞ」

「大丈夫さ、何があつてもな。お前は不測の事態に強いから全く心配いらねえよ。お前の固有魔導ほど応用力ある能力は他に知らないしな。それより、今お前がいる場所からは池は見えるか？」

「見えないな。ていうかこの庭、池まであんのか？」

「それなら、とりあえずの目標地点は屋敷を挟んで逆側だ。警備に気をつけて移動してくれ。池が見える位置で待機だ。後は追つて指示する。じゃあな。上手な潜入行動を期待するぜ盗賊王子」

「ツツ、と音がして通信が途切れる。

景は何か文句を言いたげな表情で、しばらく携帯電話を見つめて

いた。そして大きなため息をつく。

あと1秒でも通話が続いていたら、「盗賊王子って言ひつな！」と

大きな声が出ていただろう。

これまで二人の間で、景が何度も「そのアダ名をやめろ」と言つたか、数えきれないくらいになつていた。

嫌がる景に好んで嫌がらせをするように、エルムは『盗賊王子』の呼称を使い続け、廃れさせようとはしなかつた。

景の固有魔導、その適性は『盗賊王』。

しかし景は半人前だからと、エルムが名づけたのが『盗賊王子』。未熟をからかう呼び名ではあったが、邸宅の庭に忍びこんだコソ泥には、不似合いなほど立派な名にも思えた。

To Be Continued
...

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6728y/>

盗賊王子と召喚師

2011年11月20日03時14分発行